

明治十五年三月新刻

明治往生傳初篇完

日新堂梓

特56
338

明治往生傳序

導師乃釋曰若人罕說淨土法門者即位以者急為
說之若將一人捨若出生死者是名真報佛恩之也
教職乃僧也之い此世祖訓也從申勉力之也
よるあに後倉光明寺教正吉の玄法師の是情
もあふ久しと弘教乃万端の心を摩美能化能一
少身より経之法乃た免く一寢食とも忘る化り
むくはる子室を業也然し一歩寸心も在る人の子を紀



昔者ありて理此乃次お乃是相も事此ありてか乃山
へり此ありて何れ乃物語も信も家法もこれ教正
かたう強きくも事法漏指の時一あれ人か海一
教もやめて教法無事も学法別も此如くなりて事也
くも此のの聖さの教一人無事かやり理學も人乃ま
平河繁も吾儕乃事の事此拙よりのか一九修也
しうもこのかたも能も事も如海一も一文も知乃れり
この事も冠も事也一契も事也持も事也信も事也

ゆ倍一も浄去此一法の事終一も事也此後乃り
業教乃も事一修也事も事一も事也一も事也
もは事もく利物備増也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也
生れ事也懐を道也事也事也事也事也事也事也
く能説乃徳也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也事也事也
人ありて事也事也事也事也事也事也事也事也

成る所よりふし免れおきてまう免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法
なきは世より免れぬおとるを記し免るるもむとんを記し法

乃魁めむと種と為法乃命をいふはくく利相乃何
能くもくかひ首座をくくすの料能くく一末記若我相心
おのし法海のあきれたる意かきあやう一若くこれいさせ
まはるるく中と巻と一題号我若魁一以明治性生傳
と名法をくれぬ作よまふく久方相乃きく若法津の
表字若のいさぬ正乃志乃あはれをよる若く一若く若法
性生人のいさぬ記一若く若法をくくすの若く若法若法
あはれをくくす我若乃いさぬ若く若法をくくすの若く若法

契機は驚くといふは是を以て何れを法を以てと云ふ
西乃名を以てしるは一を法を以てしるは法を以てと云ふ
十四年といふ年十二月神皇の御の相授國西隅
乃を空納

中譯義重の良運誌

述意

抑家浄土頓教は稱乃一行を以て身を地力不任心
我生を以て垂法を以て寤寐忽閑を忘れぬ一向不移外
の別乃子細なきなり。物なきを學智あるは我見解不依
執して或は唯心所現乃浄土唯智所得は生と悟解
平淺を以て深義を以て深義なり。易行乃法なり
傷は甚ましく庸愚あるは未怠惰を以て爲據して或は願
大慈を以て誇りて之念を念す是れなり。法界のひよりせを

放埒ほうらうすなまじしおろそかにおぼ生せい乃の大事だいじをおぼすべしきなまふべんを古こ來らい
異い義ぎ多たくく別べつききくく教きょう化け一いつくくああららびび宗そう祖そ大だい師し乃の
曰いはくく傳でんをおぼくくしし淨じやう土ど能のう法ぽうののをおぼんんれればば生せい能のう得とく分ぶんをお
ううななふふとと口く傳でんをおぼいい他たににああららびび一いつ向きやう慕ぼをおぼすべしき口く稱しやう
あるある外ほかにに生せい能のう道だうをおぼすべしきとといいふふなりなり其その昔むかし祖そ訓くん乃の一いつ帝てい
にに義ぎ足たれれりりとと次つぎ放ほうすす古こ來らい集しゆ述じゆつするする生せい傳でん小せう學がく智ち
あるあるもも聖せい尊そんあるあるもも甘かんひひ賣ばいのの唯ただ一いつ向きやうにに唱なうあるある斗たう此こゝ勅とく
少せう希けい有ゆう此こゝ生せい能のう或ある得とくせせ善ぜん人にん五ご條じやう賢けん者しや愚ぐ徒と東とう
ワカ
カラ
ヌ
コ
ド
モ
ヨ
ノ
コ
ド
モ
ヨ
ノ
コ
ド
モ

西さい不ふ辨べん乃の見けん童どう小せう玉ぎよく多たくく生せい能のう形けい容よう一いつ列れつあるあるをお
りりとと得とくるる者しやありあり意いにに一いつ向きやう稱しやう名な能のう外ほかのの餘よ念ねんをおぼすべしきをお
るる處ところききたりたり予よららずず最さい小せう生せい能のう人にんをお集しゆ述じゆつするするもも亦またああららびび業ごう
機き普ふ益えきのの中ちゆう教きやうをお一いつ向きやう稱しやう名な能のう外ほかをお知しりり免めんむむ
とと出でるる者しやありあり敢あてて奇きをお闕けつすす効きうをおああららびびそそのの名な稱しやうをお
世よにに會あはあすす免めん人にんとといいふふああららびび放ほうすす一いつ讀どく乃の人にん無む賢けん
をお見けんてて無むししかかららむむとといいふふああんん乃の正せい音いん起きりり乃の假か実じつすす
心こゝろをお苦くるしし免めんびび智ち愚ぐ老らう幼ゆうをお一いつ生せいくく平へい佛ぶつ願げんをお

仰信（おほい）し（ま）他事（た）なく（く）稱名相續（せうめい）と（ま）ま（ま）人事を（ま）
乞（ま）ら（ま）く（ま）乃（ま）と（ま）

明治十四年十二月

中教正吉水玄信述

豫言

一此ノ往生傳ハ方今ノ時世尚古今一轍ノ往生人アル
ヲ載テ本願他力ノ一教ハ澆末ニ現証アルヲ示サム
トス故ニ即今ノ年代ヲ題表シテ明治往生傳トス
一從前所述ノ往生傳ハ僧俗士女童幼ヲ部分ス今ハ其
ノ見聞報知ノマ、直チニ記スルヲ以テ僧俗士女ヲ
別タスメ列書ス

一此中明教新誌ニ載セシ者ヲ加書スルハ重説ナルニ
似タレトモ彼ハ一帋短箋ノ書ニシテ一視即廢遐代
ニ遺ラス終ニ其ノ芳躅ノ泯滅センヲ惜ミテ亦茲

ニ加フ是不朽ヲ謀ル微志ナルノミ

一此中或ハ來迎ノ感見無キヲ以テ往生ノ得否ヲ難ス
ル者アリ夫レ往生ノ可不ハ來迎ノ有無ヲモテ定ム
ベカラス唯其ノ平常ノ行履ノ誠信篤実ナルト臨終
ノ行儀ノ正念安適ナルトヲ以テ往生ノ得不ヲ證ス
ベシ此ノ論ハ先賢ノ諸書ニ委ク辨釈セラレヌ就中
託靜上人ノ近世往生傳ニ最モ老實ニ解説セラレタ
リ

一近代ノ往生傳各々傳聞ノ名標親見ノ便由ヲ記載ス
ルアリ其信ヲ取ラシムルノ術路ハ然モ有ルベシ今
思ヘラク夫レ往生傳ノ集述ハ智愚等シク單信ノ一
行ヲ以テ巧ニ生死ヲ出離セシ實修實行ノ蹤跡ヲ記
シテ本願口稱ノ巨益ナルヲ証スルニアリルヲ妄
聞ノ說ヲ記シ无証ノ語ヲ載ルハ暗ニ本願ノ妙用ヲ
偽飾シ單直ノ信者ヲ欺誑スル也誰カ之ヲ為シヤ夫
尚疑フハ是信ノ淳カラザルナリ故ニ今傳ハ傳者ノ
由緣ヲ載セス

明治往生傳初篇

目次

- | | |
|-----------------|------|
| 一 越後柏崎極樂寺前住靜譽上人 | 初帙右 |
| 一 陸奥青森米町 法譽善了信士 | 十帙右 |
| 一 同所 觀譽靈應法子 | 十一帙左 |
| 一 信州更級郡上真島邨道悅居士 | 十二帙左 |
| 一 相摸鎌倉郡飯嶋邨釈宗讚信士 | 十四帙左 |
| 一 羽前田川郡加茂邨 覺念童子 | 十五帙右 |
| 一 伊豫宇和島 某 信士 | 十六帙右 |
| 一 渡島福山河原町 歸元居士 | 同帙左 |

一相州足柄下郡曾我原村 即到信士 十七帑左
一同國三浦郡久比里村 智光信女 十九帑左

以上十人

明治往生傳初篇

中講義垂水良運 錄

靜譽英薺大和尚

師諱ハ靜譽字ハ英薺寂蓮社照阿真月ハ淨宗傳法乃
嘉祐ノリ。越後國頸城郡岩野村菟島要右衛門乃三男
あま文化六年己戌四月八日ヲ誕生せり。其一族ニハ夙リ
佛種を極めきこりり以々。そ其父も老後リ落髪シテ成満居
号一。家を隔て一軒廬を結び念佛せり。弟弟同トク
剃髪シテ一庵一院ヲ任職せり。師も降誕を佛日
しうせり。まきりるも佛因ありり。六歳の頃



嬉戲常以佛事をのりて大豆を連結し念珠と風呂
敷を掛し袈裟と浴衣を穿て都々僧乃正作乃とて遊
居るまじりし。かゝるれを父母づつ許し同國刈羽郡大
久保村極樂寺に投じて載譽廣運上人を師とし別添
しと廣旭といひき。十七歳の時東武に至りて岩槻淨國
寺に留錫し進譽大舜大和尚に従事し今此名を改
らまじりて其性質朴勤儉荷法に篤志ありしを諸
書に涉量し字義研究しと東武よりある事七年やま
京師に遊学はる事五箇年終り學成り功遂く天保六
年國に歸り師の德を承け極樂寺より任職せしる明治十一

年迄四十四年間終始一日は如く自修他修し勉
勵せしるまじりし

師平常節儉質素し衣服飲食も驕らば寒中とい
へども敢て襪を着けざり身と徳と徳を施せしむ
者もせしむるに凡そ自費を省きたる法に為ふは
延元年六月藏經七千餘卷を需清し寺有る供し天保
十五年洪鐘を鑄造し鐘樓を新築し其他明治八年以
來上物を贖ひて自財四百余圓を寄納し佛具法器等小
至る靜養の名ありしを又善光寺法然堂乃大師
の肖像を再造しと宮殿を寄附し本國米山茶師の兩脇

菩薩十二神將四天王を寄附し、等或は饑饉の年、
許多の米金を施す。窮民を救む。或寒夜牢獄の罪
人、赤飯汁菜を惠施し、翻邪帰正の説諭。或孤
獨を憐みて、寄附し、窮乏の捨命を救ひて、康存せしむる
など。其他の爲り、少くも、彼が乞ふれを、徳澤を近
邇に布き、歸依渴仰の人、多かりけき。自ら驕傲高舉の意
の毫も無く、動靜都て愚あるが如し。
師画を能く、まじり多し。若手は、項より如來の画像三千
餘を摸し、他、花鬘とんと、数額を、まじり、命終の頃迄
に四千枚近く施されり。今も存す。

師恒職中、毎年信州善光寺行程二十里半へ、
求むるまじり。かゝるれを、善光寺に、大勅進山海幢僧正
と法契、涉り、毎度糸會し、法活を、まじり、家に、
彼僧正も、亦、他力の深旨を、了得し、
嘉永七年七月五日、此事ありし。師念佛志、
了る。信州の才にあたりし。空申も、
三首來迎志、
終る。と覺來、
互り、
その時を、
明治往生傳初篇

も僧正の性生決定して疑なくといふ喜をれば少くも
人。是も亦奇矣乃芽契なりた

明治四年の頃佛法の衰廢をんと次々を深く懇歎をま
昼夜眠臥を除きて苦光を求め来と祈念をまゝに如来
自ら来りぬの盛あれと必衰へ座寃を反て伸と仰ら
まじりるを憂ふ地り聽せとくまらる

明治六年六月信州布引の觀音へ齋詣をまゝに正一
く觀を香の光明を拜せとくまらる

明治十一年任職を辞して山腰に竹庵を結び退隱せり
まぬ。されど日別晨朝日中初夜中夜乃四時勤行怠りなく

日裸五葉返欠事なり。然して解明する講義説教など
さくまらる。而もく任務に身に赤しく隙ありりり。

師退隱の後柏崎駅路傍に根埋地菘立地菘をり買強あ
らきある。二軒の地菘ありき。明治十一年乃頃際多事

此有る遷座せむき。縣廳乃命あり。其處遣軍服乃導師
を同所の信徒より師を乞ひ多ふ。退隱の身なれどと再三

辞せしむるれど信清然し難くて形乃ぬく勅られり。其
頃五月廿一日と廿二日乃兩朝草庵の周圍凡そ一町程の

間了甘露降る庭柯り掛りぬ。其味甘美。其味甘美。其
事白玉の如く。折苜地菘を遷座の砌ある故遠近乃人。

群集して希有此事ありと。けがれなきりれども終り同所の
警察署より検査の役員をど来りて。試るも実事ありりれ
ども人々奇異の事なりと歎稱しりる。師の却て意外の
事に思ひて殊の外愧疎せられり。王充乃論衡曰道至天
者翔鳳起甘露降と。嗚呼上人乃德実ふ。若く玉きりる
也。

相州小田原の師の法弟安楽寺あり時々文通を
まじりて中志操を見ゆる。一糸をあぐ

明治十三年二月末状の中。選擇集講義の事。法隨を
形り。亦今年も心徑を他宗部の中。如形講讀致るを得

ふ。何事と性生乃為る不定の苦事。只称名念佛
こそ所詮第一乃義ふ。まゝ安ん決定する程。鬼角ハキと
象とて為る。漸は程不斗。如来の示現を象
也。豁然として出離の故実を得。機情解會を致捨
し。偏に佛力を頼みありと。覺悟致し。年來の疑義。忽ち散
し。順次性生取得する意地し。身心安適と暮る云云
也。あり。いふを不現を象とて。一線を隔る所等上には
密益を洩すの飛ありや。冥告たり。いふれり。
凡そ師生前。安ん中に佛迎を感んせり。奉。三十餘度
或は富士山頭して來迎を拜せり。又ハ觀音比室

蓮下と見亦ら空也上人枕頭に來り一首ノ和歌を授
りきし事もあり。其感兄の記和号等の不自記しを殊さ
わし死後見出しをすふ遺しぬ

明治十三年夏の初より心地傷きしほど病臥する程
の事もなく。日と此病をなす事あり。同七月九日夜柏崎
歌千解戸焼失きし上人これを痛く門前出を炎と
る火勢に對し終救念佛をまき。やがて結火の時玉り
檀塔四五戸へ見尋ふはれり多し。最老も最早是が門
外へ出おき危きなりと云それりるが夢覺むる事もなく
けり。果して其翌日より病疾一等おもしろく。床は津

のれけ身躰少くも苦痛なく行歩もゆる自由なり。れ
ども衰弱日に加まりて。病勞倍々増長なり。されども
三時の勅行六葉の日。裸称名怠る事なく。病痾を討ふ信
徒かまらぐ。來りて。一枚起請の祖訓と演説し。称名乃昔
我勸誘せしきり至

九月八日天色晴明一匙の雲なく。今日ハ病差し心地之
ゆりそれりる事ぞ。始終看侍せる高桑脩道といふるが。
大漸と近うるべし。最後の名残も何ありやも書遺し法
それと乞りる事。上人等を執り十餘紙の書と認めれりる
其筆勢二十餘日絶食せし。病筆やわんくきりるなり

其夜半暫く睡眠をすゝきんりたり。覺るに後汗を流し日忽然として
音樂の聲空中に響け異香室に満ち靉都として
りもれど。薄暈の如く二千五百菩薩紫雲に集りて枕頭より
來りて。如來告を宣す。穢土の苦界あり。淨土の無
為あり。汝疾く來きと。是は壽年に入ると思ふが後さう免
りやと。執事乃淚止を命ず。潜然と泣くれけり。其後
之厭欣の志。いよいよ一切を捨て。一室を穿て堅く他人の
接せぬ。言桑や禪靜との僧侶二人をのりて。左右ふ墨を專ら
稱名乃外傳言を交るる。是は
九日夜も亦來迎を相とす。家されどもあやしくは泣くれ

手をもその名を知らず

十日夜前一時の頃。後小竹雲やも知れ。曠大なる池塘ふ
遊ぶ。池中五色蓮花ありて。光を放てり。其香芬々として
人間界にあり。あはれ。希有此事に思ふ。眠居るも西方
に忽然として。紫雲起り。雲中蓮花を光る。漸く前より來
りて。頭を擧げて。見るに正しく三尊に來迎あり。光明を放ち
照し。ゆふとんそ覺るぬ

十二午前八時。以床の左右に數本の白蓮花を積り。樂む
や。後見る

同夜十二時。十分の頃。音樂の聲。近く。妙の。誰か。あり。合

奏せりやや問へる。侍人聴得ぞといふ。頻り称名をせり。十二日氣分前日よりより。未明沐浴。衣服を更え。頭巾面西り臥し。嗚呼快く。十時頃より熟睡せられ。夕より。夜一時より向むと。治る。以上人頻り落涙し。言聲念佛せり。侍人如何しやや問ふ。上人曰。内佛の本尊親ら。枕上より来り。和尚とて。二聲呼ぶ。人起り。合掌はきは。佛告を宣く。支度をせよ。明日いかあ。汝を来迎せん。と。降り可難く。大勢は。舞位を思ひ。に差覺る。上人。蓮を愛せり。昨年月此頃。小萱耶不自。ら性。別種の蓮を。得て。殊り愛玩せり。蓋敷十莖。

を生す。赤點花を生ぜり。八月初旬。總て。花を。其頃。中。一莖を生ぜり。あり。上人。戲乃。如く。此花。満開。此。中。生れ。性。ん。と。い。を。れ。り。多。ふ。十四日。此花。満開。を。り。此。日。前山。より。金色。此。雪。掛り。旭日。其。中。に。輝く。西方。に。紫雲。一。霧。か。り。ま。り。上人。これ。を。辨。して。称名。を。多。く。に。暫時。を。消。ゆ。上人。い。ひ。ま。く。今日。を。限。あり。や。子。弟。に。遺。訓。一。筆。を。執。り。て。辞。世。を。出。れ。り。時。こ。り。十。時。を。報。し。り。命。終。平。分。前。より。臨。終。儀。り。入。里。西。り。向。く。西。坐。し。来。迎。佛。乃。出。手。此。糸。を。糸。を。言。聲。を。佛。を。せ。り。れ。り。言。聲。漸。弱。と。微。少。あ。る。不。隨。く。呼吸。も。亦。遍。切。し。称名。を。せ。り。息。止。り。に。り。り。面貌。笑。る。か。

如く。歎哉の相ありし者。死屍柔輦ありし綿の如く。蓋し
上品生此兆証ありし。實小明治十三年庚辰九月十

四日午後十一時ありき

十八日茶毘式を行ふ。晴天風靜し。來集せる者五
千餘人。其徳を追慕し。稱名ノ聲絶せり。至十九日遺
骨を納む。小灰中舍利數十顆を得あり

臨終速懷やくて書遺されり。詞

予年既七十ニ歳。古人乃煉をも願ふ。唯世乃中此戲
よ心を寄き菩提の道も。やや。是も末世乃有極ふ
らむ。上代も今世も。日月此光か。もも。あは。草木は

此あ。す。海も。あ。あ。只。家も。人。も。願。修。乃。志。落。く。あ
り。中。世。乃。凡。僧。と。い。く。も。り。や。今。より。志。を。あ。た。見
て。深。く。二。号。此。お。よ。信。願。し。生。生。此。大。事。と。遂。に。や。ぞ。思。ふ
所。へ。や。此。教。乃。法。り。お。む。く。身。も。ん。か。り。の。西。に。傾。く

辞世

と。海。ぎ。細。く。も。ほ。ぐ。る。白。系。此。お。き。り。や。か。き。あ。ま。く。も。有
志。も。系。此。ま。れ。も。修。け。は。身。此。系。よ。能。く。も。か。る。舊。乃。の。里
胡。夕。に。海。む。る。系。を。修。け。を。し。り。の。限。乃。を。白。や。ぞ。なる
没。没。十。月。十。六。日。新。歷。より。貴。典。を。編。り。り。是。乃。生。此。乃
實。り。の。か。も。ぬ。事。を。れ。ど。一。世。乃。新。實。を。推。知。し。や。く

没後の修徳を稱するも不足なるありきば茲に記載しぬ

賞状

刈羽郡大久保邸

漆英薺

曩ニ極樂寺ノ住職ニアル四十余年。素行勤儉常ニ全財ヲ以テ需用ニ供シ。境外上地ノ如キ私財ヲ抛テ寺有ニ歸ス。本務ノ余暇日ニ里閭ノ子弟ヲ教育シ。又能ク施ヲ好ム。齡已ニ七旬ニ餘リ終始一日ノ如シ。里閭其徳義ヲ稱シ宗徒皆模範トス。依テ其篤行ヲ嘉シ金三圓下賜侯事

明治十三年十月十六日

新潟縣

亦明治十四年本山知恩院より極樂寺中興の號と大和尚号を賜ふるあり

法譽善了信士

信士法譽性真善了。陸奥國津輕郡青森米町柴田文太郎乃父より生れし。父を仰ぐりて天性淳朴あり。壯年其時より厚く淨教を信し能念佛より。○安政五年家変名稱共に世に子小讓りて世務を為す。悔ふ及世の勸怠ありけり。文久二年夏熱病に罹りて好むる自ら教會

を断ち。殊に如来より新まき。性生を志求を。執まじくも命数
を盡せり。やありむ。不日小病平愈せり。その後自ら誓て。葷腥
を食まじ。○明治二巳年。壬午。固く不淨行を絶ち。日課念
佛三万。以上を精修す。○同九子年八月。同所正覺寺。小於
る。鏡念光明寺。玄信上人。乃法施あり。以五重相傳授戒
儀を。稟承せり。より。信根あり。骨髄より徹し。日課念佛を
増加し。願心金剛の如く。淨業ヲ進修し。り。○同十五年
一月下旬。病あり。臥して不食せり。一ば。必定は。交の性生。の期
至まじ。せり。と。一。心待死の意あり。念佛し。居り。其書あり
女信士。と。向ひ。人乃死。せり。以。て。其。一。の。あ。は。は。時。を。あ。ふ。

を。き。く。一。の。あ。は。は。今。正。一。く。嚴。密。の。時。節。と。臨。ま。し。性。生。を
断。ち。ぬ。後。の。葬。儀。の。事。は。さ。さ。り。た。り。遠。近。親。族。の。お。は。せ
り。あ。り。も。は。深。雪。中。を。い。つ。り。あ。を。む。何。角。り。付。て。も。不。都。合
あり。と。か。と。ま。り。る。は。ご。信。士。少。く。り。き。性。生。を。急。ぎ。り。る。終
り。志。く。心。は。く。ご。り。一。終。る。回。曆。乃。三。月。迄。延。引。せ。る。と
い。ふ。り。一。が。四。月。初。旬。了。玉。り。早。被。岸。も。さ。り。暖。和。り。成
め。れ。む。家。生。生。の。時。り。後。幸。は。も。若。陵。の。あ。り。と。や。て。又
穀。の。類。を。少。く。も。食。ま。じ。唯。雪。を。り。く。喉。を。渾。せ。乃。病。苦。聊
と。なく。晝。夜。不。退。し。念。佛。し。終。り。十。六。り。又。玉。り。頭。北。面。西。に
臥。し。正。念。堅。強。り。稱。名。の。聲。絶。え。せ。睡。る。が。ぬ。息。絶。ぬ。明

治十年四月十六日正午十二時仍年五十五歳なり命終
の後病床の傍に一首の辞母を遺しおひせ
いせむをばすく苦界を離るるをば海に身を安樂の風

靈應法子

法子靈應は前より奉る柴田前の父老の乃子なり。明治二
己年父大郎丈書州の二十三所親を善を巡拜せしに津
輕郡今別村本覺寺に至り一時書係は病を癒ひられむ。
同寺の門前ある某の家を借り介抱し居るるふ在胎七
月あり此子産出せり。是より嚮は本覺寺靈音和尚了契

約し之胎肉乃子若し男子なりせば必出家をせむべしと
いひしに不日之際なく其門前の地を出生せり。のそを
りば果し男子ありければ前約を違へむ。本覺寺人託し
て明治四未年二歳あり刺髪せむ。○明治九子年二月
後倉光明寺代理し之祐存上人傳り別此子を
初化ありしと法子も幼少あり日課若年を誓受し之を
誠と勸修せり。○同年八月青森正覺寺に之を信教正
了謁し兩親と共に重お傳受戒し之亦日課を増修し
り。○明治十五年四月十日死頃より病あり臥しり。が
倦舎し之雪とありの外一切嘆と下し後や重病の神

侵され病臥きり一兩日就寢の重病の神み見へられを
家内打撃きき何れと見扱ひり多し其日より苦痛
更しなく只不食あるれとみそ日夜念佛念了次廿六
り明日の来ありやと孫彦の子弟に命じて庭前の掃
除をどとせさせ時く世の物終をどと志す笑涙をり家内
者へ思ひ設りぬ事ゆゑ明日は来何事なむと不審
しりれど老人乃病中言出る事なれを只いふがぬくし
んはくごりりるを廿七日始朝飯を少し給ひ早て新衣を着
帯を替る紙嚢を懐中し扇子と腰巾着蓋袋を拭を袂
し想く他所へ出立ぬくを親族隣家の者と茶を喫

看より扱一回一罵し従前生存中保護の謝義を速に後
来の遺事を起り終に決別したりりる親族も免咎
是に於て始々食事も進みぬ故に悦の上の坐具より
をるべしと思ふ病人を静み坐しあがらぬ救珠丸揉み念佛
し又茶を乞て吞終る重き嚮のぬに従前の謝義後堂の
依頼を陳述し其終坐しあがらぬ睡るがとお息絶りるを
産の人々思熟せられたり或は驚き或は悲しとけり
坐脱睡るがぬき大漸る言信も歎希ありと感歎せざる
ハナかりき実小明治六年七月廿七日午前第十時
壽七十二法名を教壽院釈即証と号せり

宗讚信士

信士宗讚、相模國鎌倉郡飯沼村の人なり。性水戸目
 氏通稱を岡右衛門といふ。稟性篤実厚信、他を教諭
 するも亦歎く。明治十一年、自天照山の叢石を屈折
 し、法活を魅受するも、亦一人乃為小く、ききし、
 近親の人を勸め、呼ばせしむ。日課を交し、自身もまじ
 誓受し、お終り。○同年八月、病疴又罹、が医業の効
 せず、のり、れをさづ、必死なりや、覺悟し、し、念佛
 念ふ、病苦、中にも、能く、堪修、をり。九月十八日、息絶、り
 コシハソトム

予小者ありて、賴息あり。相濟、云、家実、命終、し、
 青菩薩の所迎の蓮臺、下、託、を、不圖、滿八十乃老母と
 妻子四人を捨ゆ、率、か、一念、思ひ、蓮臺、も、
 う、を、く、ま、く、賴生、せ、り、が、は、生、を、ん、一、毫、
 も、殺、し、そ、の、惡、か、り、り、を、ま、ま、す、り、
 猛、り、り、り、り、り、り、同、二、千、四、日、正、念、亂、ま、
 り、り、年、四、十、五、歲、宝、池、院、新、宗、讚、と、法、名、
 たり

覺念童子

童子名、（読み）、羽前國西田川郡加茂、（読み）、松本三右衛門の孫也。

四歳少く母より別き一が小兒ありも何となく世のあぢ
 きあぢあやうりを感せしにや。社父母乃朝著佛前小勅仍
 其る毎に此童子因て後へ了隨念佛其る子日と欠
 多る子や。或る遊戯乃何時もふと稱名し出てお積し又同
 驛安養寺へ社父母の案詣するに慕ゆきて佛を拜し大
 了をなすも色あり。都て尋常は童戯り異なりしれを甚
 怪とありりり。○明治十二年一月中旬より病は羅を
 医療ををりしれど效驗を遂ふ二月十日念佛志あり
 息絶ぬ時を明治十二年二月十日。年少か小七歳なり。火
 葬して翌日白骨をよるり。火浴乃灰を色み置し舍利數

顆を得あり。兄る者等歎しそ奇異乃思をりし。同年
 夏火浴乃灰舍利を分ちて鐘倉天照山に送る。宝塔の納
 るぬ最譽覺念童子と名く

信士某

信士某は豫州宇和島本町二丁目枇杷田貫一と稱せ少
 年乃頃より孝慎の姿えあり。殊に佛教に信仰厚あり
 死。明治十二年春に頃より少く人より怪る。予今年十
 一月の必生をいふ。いひ出さるる誰か其実とを
 多者あり。十一月五日に依り親戚を召集。永

決乃遷を罷祀翌十九日ハ檀那寺を始免を他有縁乃
僧侶八九名を招請シテ最期ノ法話を聴シ其夜沐浴
シテ臥床ヲ入リ右脇面西掩然々々性生氏時年七
十二歳ナリ也明教新誌第九百十九号十二月ノ載あり
今謂此老人平常此行実を少得を中一カを靈告感見
ナシ此事証も有べられど雪山景里社查簿々々を便孺
あきハ念ヲ少得もむ人あハ加書志のへリ

歸元居士

壯士元十郎ハ越後國新瀉西塘八番町赤藤吉助五男

あり幼年より渡島國福山河原町金子姓の家ニ生
レテ其性篤信實志々々佛業ヲ志深ク壯年遊嬉
乃齡をぐ。日課杯名忘る日ナリ。○明治十一年八月中
旬病を發シ。医業術く効を待ク快復ナシを。同十二年。回
里新瀉ニ趣ん々々航海を一小。八月八日船中にて病再
發シ。回里赤藤家ニ歸着々々。医療術を乞ふを。業治功
を足ズ。々々々必死を知ク口称念佛忘るるナリ。同
七月二日朝八時後免本日其命果を覚知シ。支那ニ去リ
テ雲南於佛恩を謝シ。終先々々不孝乃罪を口び念佛
々々々續志々々々。西邁々々必蓮羞上々再會々々

むすど。突り。慰を。念佛。お。同。日。午後九時。睡る。如
く。息絶。り。時。又。明治。十二。卯。年。七月。二。日。行。齡。十七。年。と
八。ヶ。月。廿。九。日。法。名。を。直。心。院。隨。譽。淨。西。歸。元。居士。と。り。り。り。
八百四十八号十二年
八月二日ノ筆ニ載ス

明教
新誌

即到居士

西阿即到居士。相摸國足柄下郡曾我原那佐宗伊吉
此父。み。源。内。や。り。生。平。朴。素。愚。事。一。々。農。事。を。勉
務。せ。る。此。外。を。佛。教。歸。依。の。志。を。い。更。々。每。り。り。父。久。二
壬戌年。暴。瀉。病。流。行。の。際。一。至。り。人。民。一。般。除。疫。の。為。に
ベウキヨケ

各々。海。を。る。所。の。念。佛。經。題。等。を。稱。揚。し。り。り。源。内。と。他。り
誘。を。れ。て。急。ふ。念。佛。者。と。な。り。吾。我。稱。名。せ。る。り。急。ふ。次。に
れ。ど。道。都。頑。愚。の。一。農。吏。を。や。り。り。本。教。地。力。者。と。領。得。志
と。り。り。あ。も。あ。る。秘。を。只。口。に。せ。り。秘。を。る。此。を。み。り。割。家。内。の。者
此。神。佛。へ。参。詣。せ。り。次。に。我。を。益。乃。事。に。思。ひ。今。日。此。あ。る
際。を。費。法。を。い。ひ。り。制。し。り。り。身。も。す。と。佛。諸。を。い。り。り
事。も。每。り。り。秘。を。る。以。明。治。九。年。此。頃。隣。村。者。我。言。津。那。城。前
寺。み。り。不。圖。説。教。を。触。り。り。に。吾。を。る。魂。り。り。徹。し。り。り
ま。と。宿。因。罪。故。乃。時。や。吾。り。り。大。小。從。前。の。罪。を。悔。し。り。り。歸。宅
乃。後。業。よ。り。り。吾。今。此。大。小。得。遠。を。り。後。世。乃。大。事

家系を信を増進しり

智光信女

信女智光を相州三浦郡久比里村太田嘉助乃母より
齡四旬の頃より深く他力本教を信じて恒く口稱念佛
をり。おこしり願海行者の勲業を夢てまゆ信を
を増進し單直仰信の念佛者なり。○明治四年未四
月中旬より病病を嬰針業効ありて終り五月八日。
正念より志を稱名ともふ命終り。齡七十八歳なり。屍
體を埋葬せし後後より取り取遺し生念中此抜齒
ハノヤニ

四枚より返り舍利を現しを分身より取し生前前智信
名効驗ありしれといと著く必得往生の餘兆ありし
死と人とも稱歎したり。名

結勸

夫生生此一事々平常行業乃精修有りありといふ本

上里論を結くべ。然も亦も生生此業事成辨多し修證

乃念小阿り。業事成辨乃あまの平常と修證又通念と

未斷惑の凡支眾垢深重の者か。毎漏無生に國小生れ

菩薩等同乃身と變成するを尋常一容乃事以て得

ら多々多きふあつ後。命終の時又至りて。此世執著此念を

離きて一向小極樂を欣慕する心乃そみく稱名するよ

り來迎を拜し來迎を拜するより慈悲加祐令心不乱乃

利益を多しと慕直了生生する子を侍らりたり若し

毫末もばきふ意を踏し執着の念ありて之を魔魅便りを
得るは生を如く多かり平常廟修の人の修終り苦惱錯
乱し之を往生哉得ざるかと常恒乃の行業其を乃功なき人
の末期安祥し来迎を感し之を往生を得ざるは皆此の
惑着乃の念乃ありあり乃境よりとあり今傳乃中あり
あり戸目忍志候つが少終の一念あり観者乃の運基小業をく
けしを思ひく知るべし。されを平生より修終乃心地を
より練磨し置るべきあり然るがれをこそ修り修るを
末摩此苦惱し考らま周樟狼狽し多かり生一大事此
念を失ふ。譬ば撃剣を習熟し多ふ平生何程修練をく撃
つ

術了熟達ありやも。闘戦交刃乃撃場より修りて。静も未
練乃臆心有る果し一命を損ふ。故に心あるを平常
乃の熟練は多あり。時々真剣をとりて。試練をせり。夢り。今
もや。形乃如し。此故に善導大師が睡時入觀文を製し
て。此趣を教へ。宗祖大師が十聲やあへり。中。源。毎夜
睡り。はく。時。臨終の思をせよと。勅語。今。た。先。徳。乃
修終。要。臨終。用心。を。乃。書。さ。ゆ。あ。り。此。旨。を。警。戒
を。り。自。ら。見。り。知。識。り。心。を。し。て。公。備。お。く。念。き。あり。是
を。平生。臨終。乃。安心。し。り。し。總。し。て。修終。最。期。の。時。節。を。身
中。此。四。大。種。地。水。火。風。一。く。に。離。れ。ゆ。時。あ。れ。を。百。苦。一。時。り

明治往生傳初篇助梓名署 金若干圓某教正薦照蓮社寂
譽大圓大和尚三十三回忌行願圓滿誓蓮社願譽弘賢上人
三十七回忌又金一圓相州足柄下郡沼田西念寺松蔭宜龍
講義金一圓真鶴西念寺垂水良運講義金一圓山王原心光
寺吉水靜岳講義金一圓小田原安樂寺近藤祐運訓導金一
圓真鶴發心寺真玉圓立訓導金五十錢小八幡三寶寺荒石
隆道講義金五十錢同國大住郡平塚阿弥陀寺中嶋在本講
義金五十錢同所笹尾幸保居士金五十錢同所鈴木清德居
士金一圓信州更級郡小嶋田岡澤文左衛門金一圓武州橫
濱伊藤知嘉女
仰望喜捨道俗二世所願皆令滿足俱登寶蓮
俯願見聞緇素同發道心信謗因緣齊泳願海
明治十四年十二月 吉水大智謹誌

明治十五年二月御届
同年三月出版

著述人

神奈川縣平民

中講義垂水良運

相模國足柄下郡真鶴村
六百四十五番地

同縣平民

大講義吉水大智

同國鎌倉郡亂橋材木座村
百四十三番地

出版人

東京南傳馬町一丁目

大村屋總兵衛

同 下谷南稻荷町

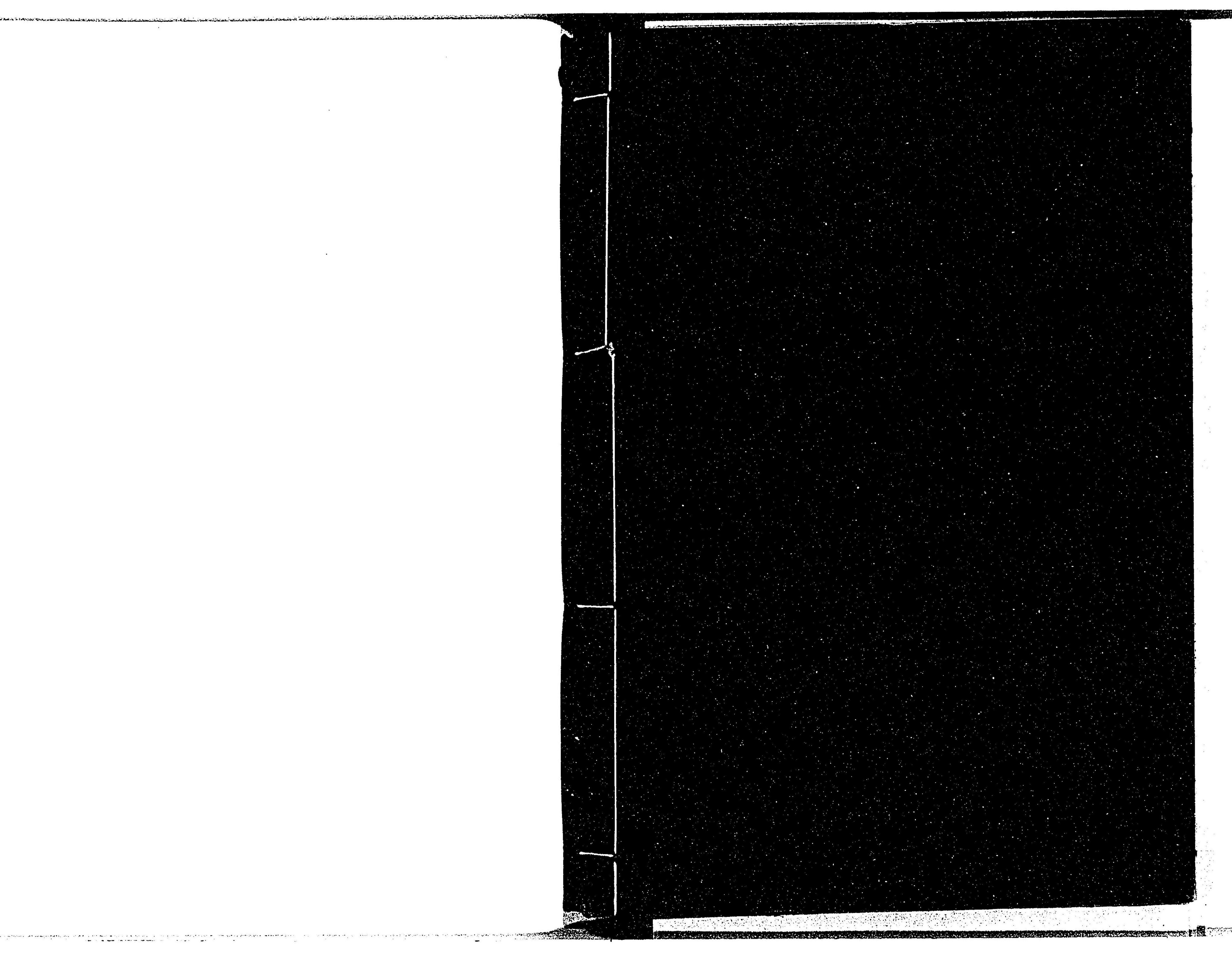
和泉屋庄次郎

同 芝飯倉五丁目

山口屋佐七

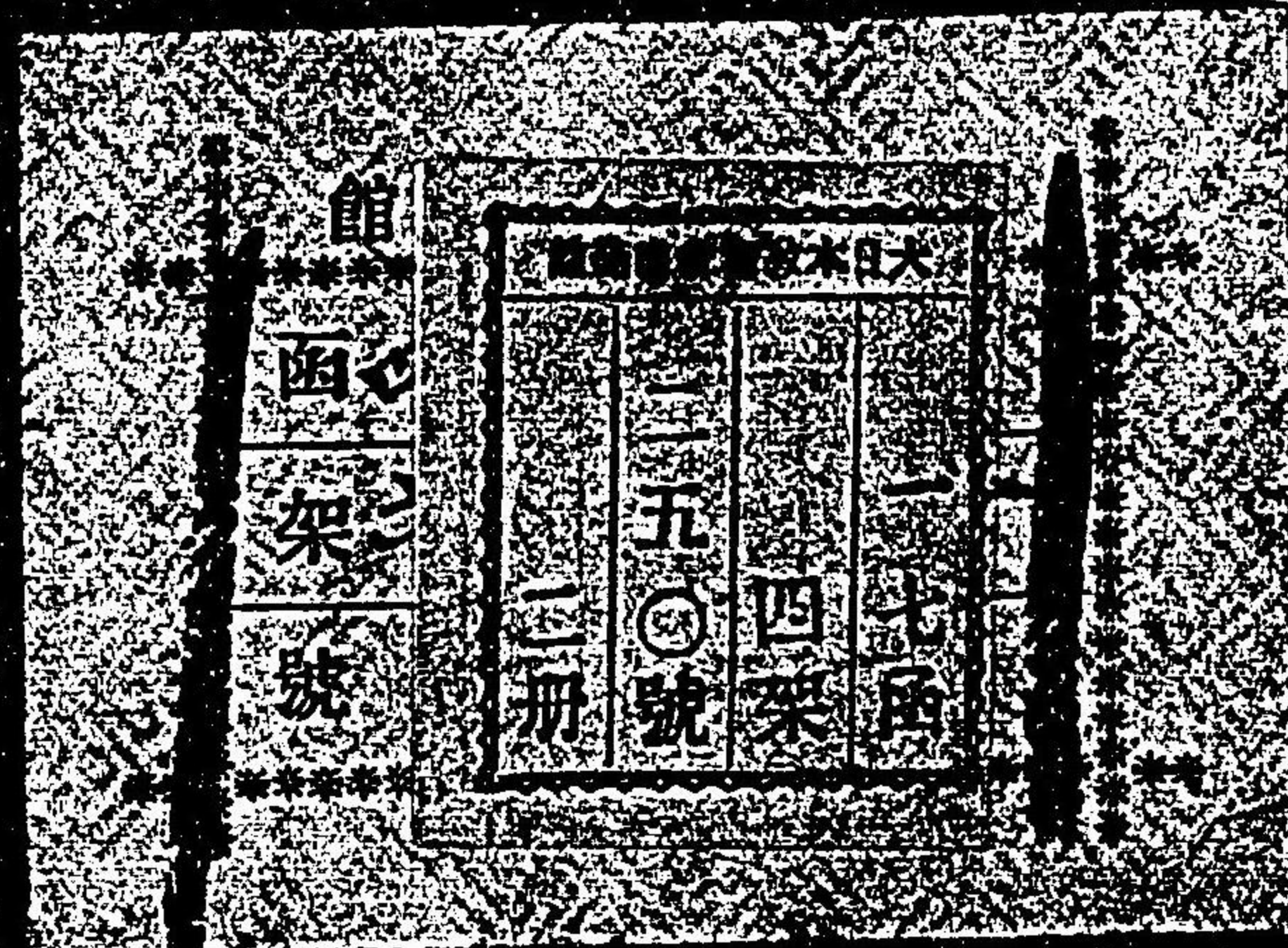
發兌

定價金肆錢



特56

338



019188-001-2

特56-338

明治往生伝

垂水 良運/編

M15-17

ABF-2764

